

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1092600020		
法人名	医療法人社団 高仁会		
事業所名	みんなの家なかんじょ		
所在地	群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町967番地		
自己評価作成日	平成27年 9月 1日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/">http://www.kaigokensaku.jp/</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人群馬社会福祉評価機構		
所在地	群馬県前橋市新前橋町13-12		
訪問調査日	平成27年10月23日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

なかんじょの理念にもあるように「その人らしさ」を大切にし、その人のできる事に着目して一人ひとりが輝けるよう職員は陰のサポート役として支援している。医療機関とも連携をとり異常の早期発見に努めている。あわせて今年度も引き続き、群馬県で実施の認知症基礎研修や実践者研修へスタッフを参加させている。昨年より取り組み始めた職員の体験や経験から「だろう」と意味づけるのではなく、「スタッフが自分なりの解釈を入れられない利用者さんの見方」を引き続きケアの場面や利用者カンファレンスで伝える様にしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は町内の中心地にあり、日常的に外出の支援が行われ、認知症にあっても生活者として暮らし続けられるよう、常に一人ひとりの意向や思いとはないかを考え、その人らしさ、かつての生活の延長線で暮らすことが出来るようにと支援を進めている。ドライブの途中にも利用者から聞く思い出話などを参考にして、支援に繋げている。その他、寝る前に入浴したい利用者には思いを受けとり、入浴支援が行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	社員全員が、事業所理念の記載カードを保有して共有し理念に沿い支援に繋がっている。地域社会での交流を理念に掲げ、買い物など近くの商店街を活用している。	日々の支援に苦渋した折には、理念の文言に振りかえることができるよう、常時各自が胸に下げ活用している。利用者の地元に出かける機会を作り、その人なりを理解した上で、理念に掲げた「地域社会での交流」とはを考えながら、生活者として暮らしが続けられるよう支援をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近くのお店や理容店を活用したり、近隣の保育園児の訪問や、高校生による合奏、フラダンス、他にも地域のお祭りなど参加させて頂き地域住民との交流を深めている。	事業所は町の中心にあり、商店・幼稚園・学校など日常的に地域との関わりを持つ関係支援に力を注ぎ、利用者が過去に経験のある飲食店や商店から出前を取ったり、食材を求めに出かけたりなど、その方の付き合いにあわせた交流に繋がっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護教室などで認知症の対応について話題提供する機会を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度は必ず実施し、意見を取り込んでいる。	定期に行なわれる会議は、事業者からの報告及びメンバーからの意見を得る機会としている。会議での地域住民の方への発信(回覧板の活用)の提案を受けて、現在取り組んでいる。最終的には、気軽に立ち寄ってもらえる施設にしてゆきたいを目指している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者より頃頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村担当者の運営推進会議への参加、変更届提出や他の書類提出などで担当係を訪問した際、情報交換を行っている。	更新書類や運営推進会議開催通知などを持ち、町が行なう定期研修会・情報交換会に参加をし、連携を図っている。担当者から、利用者の介護度が高い状況について意見を頂くなど、理解者としての関係が出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	過去に利用者一人で外出してしまったケースがあり、安全のため施錠する形をとっている。状況によっては、入り口の鍵を開けて利用者として作業をする。	マニュアルを作成して、職員には拘束をしないように入職時に説明をしている。事業所は2階・3階にあるため、エレベーターを活用している。日常的に職員の判断で、入り口の鍵は施錠をしている。	利用者一人ひとりにとっての「拘束とは」を職員全員で共通認識できるように、話し合い、ケアの実践に期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内外の研修会へ参加したり、内出血が見られたときは、原因を考え再発防止について止めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の理解にかけている。また、群馬県で実施の権利擁護の研修へも参加するようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族との信頼関係が築けている。生活状況を伝えるように面会時や月に1回写真を送るなどを中心に、関わりを多く持つようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	施設の介護教室を定期的で開催し、家族からの要望を聞くなど交流の場を設けている。	面会時には、極力、話しやすい場の提供をするよう心がけている。年2回、介護者教室を開催して家族同士の交流の機会を提供し、意見を得る機会としている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個人面談の機会を設け、一人一人の意見が聞ける体制を作っている。今年度は法人の職場満足度調査を実施している。	法人として、個人面談を年2回計画的に実施している。今年度は職場満足度調査を実施し、職員の意向の把握の取り組みが行なわれている。日常的に、意見を言いやすい関係が作られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	新人からベテラン職員の個々の能力に合った研修を提案している、対応に不安を抱えている職員に対しては、個別にて問題解決に取り組んでいる。自己評価等の用紙を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	積極的に研修に参加できるように、研修情報と提供している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	定期的に管理者が事業所の状況を報告し、状況を伝えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	申し送りノートを活用し、問題点や、気づいた点はすぐに対応出来るよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	話をする機会を積極定期に活用し、本人・家族の意向を理解するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族へ通院リハビリや専門外来などを提案する機会を作っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフ全員を介護者の立場だけに位置づけず、一緒に生活する視点を重要視している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	報告・相談をする事で、信頼関係が築けるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者と1対1で本人の家へ出かけたり、なじみの床屋などを利用している。	日常の外出支援のときにも、利用者の思い出話(情報)をもとに、入居前の住所地にでかけるようにしたり、関係者との繋がりを支援したり、実践を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係が良くない状況でも、また孤立しないように、利用者の配置を調整しできるだけ問題に発展しないようにしている。また、2階と3階の利用者同士の交流も日々行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所の家族との定期的な連絡は無いが、相談を受ける窓口があることは伝える様にしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人に確認をしてできるだけ理解するようにしている。難しい場合は家族へ様子を聞くようにしている。	生活歴の把握から、本人の得意だったであろう仕事や趣味、人との事など記憶できるレベルに寄り添い、今の気持ちが本人らしく生活できるよう介護場面に活かし取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者との会話の中で新しい発見があったときには、カンファレンスで報告し職員で共有するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人のその日の状態に合わせて、施設内外の生活を提供できるようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に1回のカンファレンスを設け、9名の生活状況の変化をモニタリングしている。	ケアマネージャーは、日々の実践記録から介護計画を作成し、モニタリング時にチームで話し合う体制としている。その内容は、介護状況の報告に集中する傾向にある。	ケアプラン作成はプロセスを踏み作成され、職員がみなで共有して活用できる取り組みに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各利用者のケース記録を細かく記入し、必要に応じて送りノートへも記入して、全職員で状況把握できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	支援内容は、その状況に応じて変化し、職員も柔軟に対応できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の温泉や足湯を利用したり、お祭りなど町の事業へも参加している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医へ生活状況を受診時に伝えるほか、必要に応じて必要な診療を提供できるようにしている。	事業所は医療法人が母体運営にあり、基本母体の医療機関に変更の可否の説明を行い、意向を把握した上で主治医を決めている。家族や本人の意向に沿い、入居前の医療機関を継続している利用者もいる。往診や受診の付き添い支援をおこない、健康維持支援にも力を注いでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同施設の看護師へ状況相談は24時間でき体制となって居る。またかかりつけ医療機関の看護師や併設事業所の看護師へも相談する体制を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中のお見舞いへ職員が出かけて、本人へ面会することと合わせ、病院の看護師から入院中の状況を聞いたり、施設の生活状況を伝える様にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族との話し合いの場を設け、お互いに共通の認識で話をするように努めている。	入居時に、重度化における対応指針書をもとに家族・本人の意向を把握するシステムがある。身体面においては、医師をはじめとする関係チーム(職員・家族)で話し合い、対応方針をきめ対応としている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	介護職員の看護面についての知識が乏しく、適宜カンファレンスで勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水や缶詰などの備蓄をしている。火災における避難訓練は、毎年1回は消防職員の立ち会いの下で実施している。地域の協力体制は引き続き努力する必要がある。	定期に行なう避難訓練(防災)は、消防署の協力の下に実施している。まずは「火をださない」ことを、職員で注意して取り組んでいる。備蓄も考慮し、事業所が災害時の避難場所になる想定も考えにある。	事業所が避難場所になる想定もあることから、近隣の協力者に加わってもらい、更なる災害対策の取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	不適切な言葉は使わないように努力している、その方の性格などを理解して声掛けを行っているが、時々軟らかく方言などを使っている。	不適切な言語に注意しているが、職員間の共通理解には及ばず、日常会話もそれぞれの判断でコミュニケーションが行われている。	入居者一人ひとり(個人)がもつ尊厳とはを理解したうえで、プライバシーへの配慮を職員が実践できることに期待したい
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の病状や状態を観察しながら、出かけたところや食べたい物を聞いて、本人が選択できるような場面を設定し、声をかけるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日の流れは決まってないので、その日に何をしたいかを聞いて予定を立てている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	何を着るのかなどは本人にできるけ決めてもらい、洋服を買いに出かけた際は本人が選ぶことができるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好き嫌いを理解し、毎食みんなで作るようにしている。	自立支援の介護の実践(買い物や準備・調理)を、ともに行なう介護支援が行われている。職員も一緒に食事をしている。	生活のなかで楽しい食事の時間とはを職員と話し合い、ステップした実践の取り組みに期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	協力医療機関の管理栄養士に相談しながら、メニューなどを決めるようにしたり、週1回は管理栄養士が施設へ来て、食事場面を確認したり、一緒に作業している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	できる方には声掛けで促し、できない方には職員が介助して行っている。義歯の口臭対策として入れ歯洗浄剤やマウスウォッシュを活用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	24時間表で排泄状況をチェックし声掛けで促し、布パンツとリハビリパンツを効果的に利用する様に支援している。	基本、トイレでの排泄が出来るよう支援する考えの下、実践している。誘導支援が必要な利用者にはさりげない声かけで、気持ちよく介護を受けてもらえるよう支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	管理栄養士からのアドバイスを踏まえて、申し送りの時間を中心に職員で対応が統一できるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の入りたい時間にできるだけ添えるようにしている。	利用者には、湯冷めが心配だからという理由で寝る前に入浴をしたいとの意向があり、夜間の入浴支援が行われている。気の合う方との入浴を楽しみとしている方もいる。入浴後の合言葉「ああ、さっぱりした」を発言してもらえるよう支援を実践している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼夜逆転に繋がらないように、日中の活動量が多くなるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者全員の状況を把握するまでには至っていないが、ケース記録へは服薬内容説明書を綴り、確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器洗いや洗濯・掃除など出来る事をできる場面で一緒に行い、役割が持っているようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症の流行の季節を除いて、外出などの場所は制限しないようにしている。	その日必要な調理材料は、利用者と一緒に意見を聞きながら買い物に出かけ、購入をする習慣としている。生活のなかに四季折々を体感できるよう、近隣の道の駅・温泉足湯コーナーを活用したり、行きたい場所にてかけ会話が増えるよう支援をしたりしている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には施設の決まった場所で預かっているが、本人からの求めがあったときは直ぐに使えるようになっている。またご家族との話で本人が持つこととなれば、自分の部屋で管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をしたい希望があれば電話をかけてもらう。手紙が届いたら本人へ届けるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	寒い時期はこたつを作ったり家具の配置を換えたりと、動線も考えながら空間を整備している。	食堂や浴室・トイレなど共用空間は、清潔に保たれている。居間には季節の花や利用者の作った作品が飾られ、ソファーには気の合う同士が並んで語らう場所となるよう配慮し、窓からはベランダに鉢植えの野菜や花の育つ様子が見えるように工夫され、話題題材に活用している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングだけではなく、自室でお茶を飲んだりできるようにしている。また、利用者同士で部屋で話している場面も見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所前から自宅で使用していたタンスや、家具、家族の写真などが飾っており、過ごしやすく工夫で来ている。	入居時には、自前の「なじみとなる家具や調度品」を持参されるか相談の下、家族の方の意見を採り入れ決めている。入居後には、本人の生活動線に配慮し、自力動作が優先できるように考案の提供などを繰り返し、今の状態に合う模様替えにも力を注いでいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	移動などの機能維持のため、車椅子などの利用は場面を見て提供している。できない事よりも、出来る事をしてもらい、生活の自信を保っていけるようにしている。		